

子どもの主体的な学習をつくりだす授業の探究 — 斎藤喜博の教育実践の研究を通して —

19057 荻田泰則

キーワード： 全ての子ども 教師のスキル 一斉授業

I 研究の目的・ねらい

1 研究の背景

「子どもの主体的な学習をつくりだす授業」の実現は、現今の児童・生徒の学習の状況や各種調査・研究が示唆するように喫緊に取り組まなければならない授業課題であり教育課題でもある。またはそれは学校教育の改革に深い関わりがある。斎藤喜博(教育実践者)の教育実践(授業)のなかには、それに対しての多くの示唆ある事実がある。その実践を研究することを通して課題解決に取り組みたい。

2 研究の目的

「子どもの主体的な学習をつくりだす授業」の成因はなにかを明らかにする。

3 研究の方法

- ・ 斎藤喜博の実践(授業)の記録(「文字・映像」)や言説の分析をする。
- ・ 自らの実践(授業)とその分析を行う。
- ・ 「斎藤喜博の教育実践についての研究」の文献研究を行う。

II 研究の結果

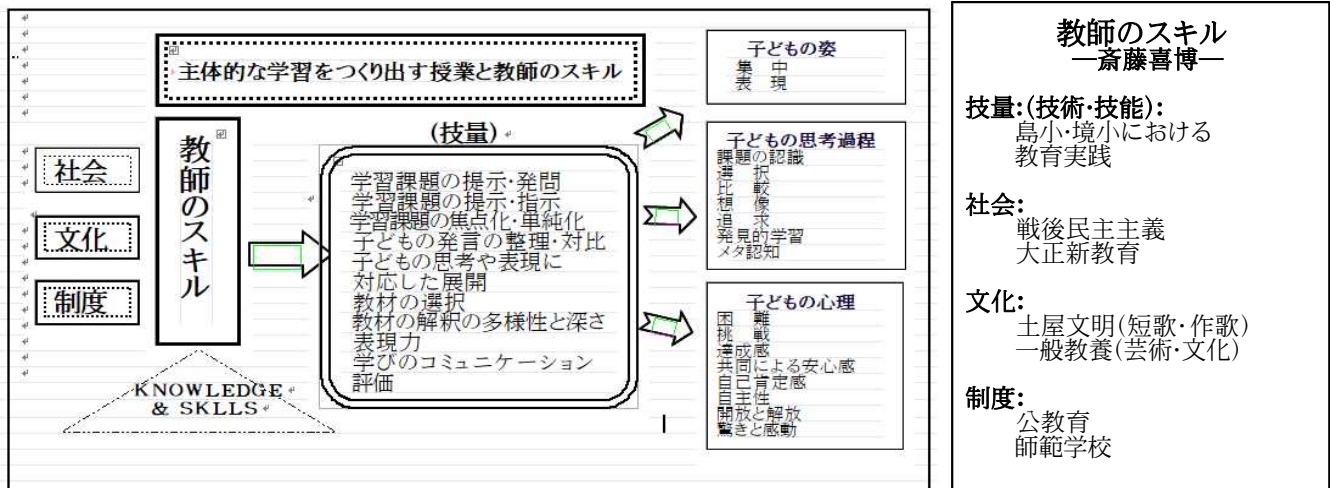
1 「子どもの主体的な学習」を捉える4つの観点

斎藤喜博の教育実践(授業)の研究・分析を通して「子どもの主体的な学習」を捉える4つの観点を得た。

観点	内容	説明
子どもの姿	集中	学習課題やその達成について意識を焦点化している。
	表現	自分の考えや感じを身体を含む記号で表現している。
子どもの思考過程	課題の認識	何を学習するかを認識する。
	選択	自分の考えや感じたことをもとに提示されたものから選ぶ。
	比較	提示された考えや表現を自らの考えに基づいて比較・検討する。
	想像	想像力を働かせて自らのイメージをつくる。
	追求	次々課題を明らかにして行こうとする思考の運動
	発見的学習	未知な知識や技能を追求の過程で獲得する。
	メタ認知	自分の事実と変わった自分を認識する。
子どもの心理	困難	自分にとって難しいができそうなことに取り組む。
	挑戦	自分の努力や工夫によって未知なるものを得よう試みる。
	達成感	課題に対してそれを獲得したことによる充実と次への意欲
	共同による安心感	同じ学習と一緒に取り組み、学んでいることによる安心感と信頼感
	自己肯定感	自分かできたことや人から褒められ、認められる経験から得る気持ち
	自主性	他者の意向ではなく、自分から決めて行おうとする姿勢や態度
	開放と解放	心も身体も開かれた状態 学習課題を獲得した後の自己変革の状態
技 量 (技術・技能)	驚きと感動	学習したことに対する喜びや楽しさ等の感情の高揚
	学習課題の提示・発問	主体的に考え、表現しようとする内容を持つ教師の問いかけ
	学習課題の提示・指示	課題に向かうための教師の働きかける具体的なことば
	学習課題の焦点化・単純化	考えや思いをより深く集中させるために、学習課題を明確で単純にすること
	子どもの発言の整理・対比	多様な考えや感じを、比較・検討させるため分けて明確にすること
	子どもの思考や表現に対応した展開	子どもの思考の状態や速度、また内容に応じて学習を展開していくこと
	教材の選択	深く考えたり、表現させるための学習課題を持つ教材を選ぶこと
	教材の解釈の多様性と深さ	子どもの学習状況に応じた適切な教材を選ぶこと
	表現力	教材の持つ深い内容を読み取ったり、学習課題を引き出すこと
	学びのコミュニケーション	ことばと身体で子どもに明確に納得させる指示内容を伝えること
評価	子どもたちの考えや表現を明確にし、つないたり、拡大したりして、交流させること	
	子どもの表現から学習課題やよい点を指摘し、取り上げること	

2 「子どもの主体的な学習」は教師のスキルによって生みだされる。

子どもの主体的な授業をつくりだすのは教師のスキルと捉えた。教師のスキルとはその技量(技術・技能等)に表れる教育の理論と実践の往還の上に成り立つ教師の資質・能力と押さえた。



III 考察

1 主体的な学習

・「主体的な学習」は、子どもが知識や技能を獲得する過程で生ずる。「学習」は積極的に多様な能力—思考力や判断力・表現力の他にある人間の諸能力を含む—の発揮や学びに向かう力を生み出し、人間性等を育成させる活動と考える。

・「主体的な学習」は、子どもの学習課題への取り組み、子どもと教師との対話、追求を通じた新しい知識や技能の発見的な獲得、また自らの認識や資質の変革の過程において導きだされる、と考えられる。

・「主体的な学習」は、同じ学習の場の子どもの存在(子どもたちがともに共通した学習課題に取り組むことの安心感、信頼感)が土台にある。発達心理学や幼児教育、特別支援教育においても「子どもの学習や学び」に対して同様の考えがある。

・「主体的な学習」は、その子どもの思考や想像や感性が行使され、学習の課題が達成される過程における子どもの表現(姿)とし表れる。

2 授業

・「主体的な学習」をつくりだす授業は、それを実現し、表出させる教師のスキルによってなされる。これはその観点からみた斎藤喜博や自らの実践(授業)における主題の実現によってその有用性と汎用性が確認できた。

・「主体的な学習」をつくりだす授業は、子どもを中心とした、子どもの視点に立った方向性をもって展開されるものでなければならない、と考える。なぜなら、主体性は子どもの個のそのときの思考や感性の状態を基点に生ずるものだからである。

・「主体的な学習」をつくりだす授業においては、思考力等の能力の育成もなされるが、子どもの互いに学び合う姿勢や、相手の思考や感情を理解し考える態度などの人間性の涵養にもつながる。これは学習過程におけるコミュニケーション論にもつながると考えられる。さらにその視点の重要性は「一斉指導においては、単に知識や認識が伝達されるだけではなく、多数の人間が共通の事柄や課題に向かうことによって、何かしらの生の営みがなされているのではないか。」という中田基昭の授業論の考えにもつながるものと考えられる。

・授業に対する教師のスキル(技量)の内容が明確で言語化し説明できるものとしても、実際の授業でそれを実現するためには、子どもの視点に立った展開がなされなければならない。その発問や指示は子どもの納得するものでなければならない。

・一斉授業は、教師のスキルによって、同じ場と空間で、多数の子どもが同じ教材を学習しながら、共同して知識・技能を獲得し、その過程で人間の持つ諸能力が引き出される最も高度な学習形態である、と考える。

3 教師のスキル

・教師のスキルはその教師の背景としての「社会・文化・制度等」に多くの影響を受けていると考えられる。斎藤喜博の教師としてのスキル形成においてもそのことは明らかだ、と考える。(教師のスキル「斎藤喜博」を参照)

・「子どもの主体的な学習をつくりだす授業」を生みだす教師は、思想的背景として「自由主義・民主主義・平等主義」が必要と考える。「主体性な学習」をするためには、個の思考や表現の自由、多様な考えを持つ平等な他者の存在が必要であり、その目的も「全ての子どもたちの学習」でなければならぬ公教育が土台としてあるからだ、と考える。

・「主体的な学習をつくりだすのは教師のスキルであり、授業という場である」という観点で主題をとらえると、教師の技量(資質・能力)が課題となる。したがって、教師のスキルは専門的な訓練が必要とされる。野村新は斎藤喜博の教師論を論じながらその確立の必要性を指摘している。

・教師のスキルを高める方法として、実践への取り組み方も参考になる。「教育、授業が人間が人間に働きかける仕事と捉えれば、子どもを深く知ることが大切であり、実践(授業)のなかで子どもを発見し、それに見合う仕事をしていく」とする武田常夫の実践への姿勢は教師の学ぶべき在り方と考える。

・授業において「すべての子ども」とく、「できない、分からないという子ども」を指導の対象にしたとき、汎用性のある教師のスキルが生まれる可能性がある、と考える。

IV 課題

1 実践(授業)

・授業において学習のねらいが子どものうちに実現するためには、子どもを中心とした、子どもの視点に立った授業の方向性と教師のスキルが必要である。実践を通して、その内容を多様に豊かにし明示して行く。

・授業づくりにおける専門的な知識・技能または知見の生かし方を実践的に探究する。

・教師のスキルを高める方法に二つの方向がある。一つは実践を通して、もう一つは一般教養(真・善・美)の学習がある。それが教師の技量(技術・技能等)を深めていくことにつながると考えられる。

2 研究

・「教師の学習過程の上に子どもの学習がつくられる。」と主張する宮崎清孝の視点は、授業における「子どもの学習の成立」の問題として重要なものであり、今後研究し明らかにすべき課題と考える。

・インクルーシブ教育における「主体的な学習をつくりだす授業づくり」にも斎藤喜博の実践のなかには多くの示唆する事実がある。今後の研究課題になると考えられる。

・授業のなかで「子どもの主体的な学習」を実現するためには、「子どもの思考の状態や速度」に対応した展開が必要なように、教師の教授の原則があると考えられる。それを「教師の専門家としてのスキルの内容(現職の教師、教員養成の学生を共通して支えるもの)」と捉え、実践と研究の往還を通して研究し確立する必要がある。

・教育の仕事が「人間が人間に働きかける仕事」と捉え、また授業が「教材を通しての教師による児童・生徒の教育」であれば、その「授業の持つ機能や意味」も研究の対象となるのではないだろうか。

・実践(授業)による子どもの変革が教師の変革を導くものであるならば、その視点は「教師の仕事の生きがい論」につながる。現今の教師の問題を考えるうえで、一つの解決への提示となるのではないかと考える。

V 研究成果の学校教育における位置づけ、意義、応用性、期待

授業(一斉授業)による「子どもの主体的な学習」の実現は、学校における新たな「授業の可能性」の再認識につながる。またそれは教育における子どもの変革と教師の仕事(実践)の内容の充実につながり、ひいては学校教育の改善に大きく資するものになると考えられる。

主題の実現には「教師のスキル」が重要な役割を果たすことが明らかになったことから、そのことは教師の仕事の専門性と研修(教師教育も含め)の内容になりうるものであり、その確立が待たれる。

VI 引用・参考文献

宮崎清孝(2009)『子どもの学び 教師の学び 斎藤喜博とグイコツキー派教育学』一莖書房。

中田基昭(1993)『授業の現象学』東京大学出版会。

野村新 (1982)「教師論の系譜と展開」『斎藤喜博個人雑誌「開く」』Vo 30.31-43。

斎藤喜博(1983)『わたしの授業 I (第二期斎藤喜博全集4)』国土社。

武田常夫(1989)『斎藤喜博抄』筑摩書房。